

狐霊と老婆

私が実験した多くの中での傑作を一つ書いてみよう。之は五十余歳の老婆で、狐霊が二三十匹憑依してをり、狐霊は常に種々の方法を以て老婆を苦しめる。それで私の家へ逗留させて霊的治療を施し研究の対象としたのである。その間五六ヶ月位であつたが、此老婆は狐の喋舌る事が判ると共に又狐の喋舌るそのままが老婆の口から出るのである。或日老婆曰く「先生狐の奴が」今日は此婆を殺すからそう思え、今心臓を止めてしまふ」といふと、自分の心臓の下へ入り掻き廻してゐるので、痛くて息が止まりそうで直に死ぬから、その前に家族に遇ひたいから呼んで貰ひたい。」と苦しみ乍ら言ふので、私も驚いて急ぎ電話で招び寄せた。老婆の夫君初め五六人の家族が、老婆を取巻いて、死の直前の如き愁歎場が現出した。処が時間を経つに従ひ、漸次苦痛は薄らぎ二三時間後には全く平常通りとなつたので、家族も安心して引揚げたといふ訳でマンマと一杯食は

されたのである。其後二三回同様の事があつたが、私も懲りて騙されなかった。

或日の夕方老婆曰く、「先生、今朝狐の奴が」今日は此婆の小便を止めてしまふ」といった所それきり小便が出ない。」といふので、私は膀胱の辺りへ霊の放射をした処、間もなく尿が出、平常の如くになった。又或日老婆曰く、「此頃食事中狐が」モウ飯を食はせない」といふと胸の辺りで悶えて、どうしても食物が入らない。」といふので私は、「それじゃ私と一緒に食べなさい。」と言って一緒に膳に向ひ、共に食事をした処、果して「今狐が食はせないといひます、アゝもう飯が通りません。」といふ。早速私は飯に霊を入れ、又老婆の食道のあたりへ霊射すると、すぐに喰べられるやうになったが其後はそういう事はなかった。又私が治療を行ふ時、首の付根、腋の下等を指頭を以て探ると、豆粒大の塊が幾つもあるもので、それを一々指頭の手先で霊射すると、その一つ一つが狐霊で、其度毎に狐霊は悲鳴を上げ、老婆の口を藉りて曰く「アッいけねへ、

見つかっちゃった、アア苦しい、痛い、助けてくれ今出る今出る。」といふやうな具合で、一つ一つ出てゆく。その数凡そ二三十位はあつたであらう。

或朝早く、私の寝てゐる部屋の方へ向つて廊下伝ひに血相變えて老婆が来るので家人は私を起し、注意を与えてくれた。私は飛起きてみると、今しも老婆は異様な眼付をし、片手を後へ廻し何か持つてゐるらしく、私にヂリヂリ迫つて来る。私は飛付いて隠してゐる手を握ると煙管を持つてゐるので、

「何をするか。」—と言ふと、

「先生を殴りに来たんだ。」—といふ。私は抱えるやうにして老婆の部屋へ連れ行き、そこへ坐らせ、前頭部に向つて靈射する。

と、前頭部には多くの狐霊が居たので、狐霊等声を揃えて「サア—大變だ大變だみんな逃げろ逃げろ、アア堪らねへ、痛てえ、苦しい」といふので私は可笑しさを堪え、数十分靈射すると、平常の如くなつたのである。又或日老婆は私に向つて「先生妾に頭があります

か？」と質く、私は頭へ触り乍ら、「此通りチャントあるじゃないか。」といふと老婆は、「実は狐の奴が」今日は婆の頭を溶かしてしまふ」といふので、妾は心配でならないのです。」といふ。此事以来常に手鏡を持って、映る自分の頭をみつめてゐる。訊ねると、「狐に溶されるのが心配で、鏡が放せない。」という。

「そんな馬鹿な事はない。」と私は何回言っても信じないので困ったのであつた。以上の如き種々の症状はあつても、他は別に変つてゐない。勿論精神病者でもない。従而、「貴女は正氣の氣狂だ。」と私はよく言つてやつた。然らば此の原因は何であるかといふと、此老婆は前世に於て女郎屋の主婦の如きもので、多くの若い女を使つて稼がしたが、それ等若い女の職業が客を騙す狐の如き事をさせた為、靈界に往つて畜生道に墜ち狐靈となつたもので、その原因が老婆にあるから怨んだ揚句、老婆に憑依し悩ましつつ復讐を行つてゐる訳である。此意味によつて現世に於ける職業、例えば遊女は

狐、芸妓は猫といふやうに、相応の運命に墜ちるのである。従而人間はどうしても人間として愧しからぬ行為をなすべきである。